

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 18 日現在

機関番号：33918

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370804

研究課題名(和文) 17～19世紀の近畿・東海地方における富士信仰の受容

研究課題名(英文) Reception of Faith in Mt. Fuji in the Kinki-Tokai region from the 17th century to the 19th century

研究代表者

山形 隆司 (YAMAGATA, Takashi)

日本福祉大学・知多半島総合研究所・研究員

研究者番号：00342999

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：近世における富士信仰については、主に江戸や関東地方の事例が研究対象となってきた。その結果、独自の礼拝対象と教義を持つ江戸の「富士講」の信仰形態が、近世の富士信仰のイメージとして定着してきた。しかし、これは富士信仰の全体像を考える上では偏ったものである。そこで、近畿・東海地方において富士信仰の事例を掘り起こし、当地方において富士信仰がどのように受容され、御師などの宗教者と地域社会の関係がいかなるものであったのかを検討することを課題とした。本研究では、この課題を考察するにあたり富士山の各登山口集落に残る史料と登拝者を送り出す地域社会に残る史料の両者を相互に分析した。

研究成果の概要(英文)：About the Faith in Mt. Fuji in the Edo period, the example of Edo and the Kanto region has been studied mainly. As a result, the faith form of "Fujiko" in Edo was established as an image of the Faith in Mt. Fuji. "Fujiko" was the group with its own courtesy and doctrine. However, this image is partial in thinking about perspective of the Faith in Mt. Fuji. Therefore I caught an example of the Faith in Mt. Fuji in the Kinki-Tokai region. And I considered how the Faith in Mt. Fuji was received in the region, and what's more, what kind of relationship the communities and religion person had. In this research, we analyzed the historical materials left in the climbing mouth of Mt. Fuji and the hometown of mountaineers.

研究分野：日本近世史

キーワード：富士信仰 富士講 参詣 道中 御師 檀那 垢離 三禅定

1. 研究開始当初の背景

近年、富士山に対して日本人が抱いてきた意識を掘り下げて日本文化の特性に迫ろうとする学際的研究が行われ、多くの貴重な成果が生まれてきた。こうした中で、近世における富士信仰についても重要な研究成果が発表されてきた。しかし、一つの問題点がある。それは、近世の富士信仰についてのイメージの偏りである。

もっぱら近世の富士信仰については、江戸や関東の事例が研究対象となってきた。とくに戦国時代末期から近世初期に富士山麓の人穴で修行をした角行藤仏やその流れを汲み、享保期(1716 - 36)以降に江戸で活動した村上光清や食行身禄、彼らの系譜を引く「富士講」に圧倒的な比重が置かれて研究が進展してきた。その結果、独自の礼拝対象と教義を持つ彼らの信仰形態が近世の富士信仰のあり方を代表するものとなり、富士講と称するものは全国的に分布するにもかかわらず、江戸・関東の「富士講」がその代名詞となっている。

一方で、江戸・関東以外の地域における富士信仰の研究は立ち遅れている状況にあり、近世における富士信仰のイメージは江戸・関東の事例によって形作られたものとなっており、富士信仰の全体像を考える上では偏ったものとなっているのが現状であった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、江戸・関東に大きな比重を置いて進展してきたこれまでの近世の富士信仰研究を相対化するため、近畿・東海地方において富士信仰の事例を掘り起こし、当地方において富士信仰がどのように受容され、御師などの宗教者と地域社会の関係がいかなるものであったのかを検討しようとするものであった。

この目的を達成するため、富士山の各登山口集落に残る史料と登拝者を送り出す地域社会に残る史料、この両者を相互に分析・検討することを研究の眼目とした。

3. 研究の方法

本研究では、近世の近畿・東海地方において富士信仰がどのように受容され、御師などの宗教者と地域社会の関係がいかなるものであったのかを検討するため、具体的には以下の3点の課題を設定した。

(1)富士山の各登山口集落に残る史料により近世における近畿・東海地方からの登拝者の地域的分布を探り、御師・山伏などの宗教者と登拝者を送り出す地域社会との関係を分析する。

(2)近畿・東海地方に残る富士山登拝を含む道中記および富士(浅間)講関係の史料を収集して、参詣行為および講の特性を分析する。

(3)現在でも富士信仰に関連する行事が盛んに行われている三重県の伊勢・志摩・紀北地域において民俗調査を実施し、これを記録

するとともに富士信仰の地域への定着過程を検討する。

4. 研究成果

(1)近世には、富士山の登山口として北麓に吉田口(山梨県富士吉田市)・川口口(同県富士河口湖町)、東麓に須走口(静岡県小山町)、南東麓に須山口(同県裾野市)、南西麓に大宮口・村山口(同県富士宮市)が存在した。また各登山口の集落では、宿坊が営まれており、大宮口では本宮浅間神社の社人、村山口では興法寺の修験者というように宗教者がその任にあたり、彼らは登山ができない季節には全国各地の檀那場をめぐり配札や勧化を行い参詣者の拡大に努めていた。このうち、吉田口は江戸で盛んであった「富士講」の講員が登拝する一大拠点となっていた。

近畿・東海地方からの富士山参詣者は、地理的な理由と古くから富士信仰の中心となっていた大宮口の本宮浅間神社や村山口の興法寺の各宿坊との関係から、多くは大宮口・村山口を登拝の拠点としたと考えられる。また、近世に現在の近畿・東海地方から富士山登拝を果たした人の道中記では、須山口を拠点に登拝している例が比較的多く見られる。これらのことから、本研究では村山口と須山口に残された道者帳(参詣者名簿)を調査して一覧表にまとめ、分析を試みた。

村山口の興法寺大鏡坊で、19世紀後半の道者(参詣者)を書き留めた帳面〔尾張国・美濃国・近江国道者帳写〕(旧大鏡坊富士市文書)は、尾張国知多郡、近江国甲賀郡、名古屋の記載が別仕立てになっているのが特徴である。

この帳面によれば、尾張国知多郡の場合、安永6年(1777)から文化2年(1805)までの28年間に同郡内から437名の参詣者があり、尾張国全体での参詣者が528名であるので、尾張国からの参詣者のうち8割以上は知多郡から来ていたことになる。また近江国甲賀郡の場合は、安永4年(1775)から享和3年(1803)までの29年間に379名の参詣者があり、近江国全体での参詣者が486名であるので、近江国からの休泊者のうち7割以上は甲賀郡から来ていたことになる。名古屋については、天明5年(1785)から享和2年(1802)の18年間に28名で尾張国内での比率が高いわけではないが、都市部からの参詣者ということで書き分けられたのかもしれない。また美濃国については、「丹州三原郡」「丹州天田郡」「丹州桑田郡」「泉州泉郡」といった他国の村名が記載される混乱が見られるが、これを除けば安永4年(1775)から享和2年(1802)までの28年間に美濃国全体での参詣者は48名、そのうち武儀郡が39名で、美濃国からの参詣者の8割以上を占めていることが分かる。

一方で、近畿・東海地方からの参詣者のうち須山口を拠点として、富士山登拝を行っている例が比較的多く見られる。

例えば、東海道の二川宿（現 愛知県豊橋市）の紅林一隠は寛政 12 年（1800）に、この年が庚申年ということもあって念願の富士山へ赴き、江戸・日光も見物して帰郷している。その際には、富士山へは須山口から登拝し須走口へ下山して御殿場を経由して箱根へ出て江戸へ向かっている。このことについて、一隠は道中で知り合った者から「余がことき老足は表大宮口は至て嶮なり、須山・須走の両の口、道は遠けれど攀やすき所有り」と聞いたからであると記している。つまり、一隠の場合は、大宮口の険阻な道避けて須山口へ廻ったことが分かる。

「富士筆記」（西尾市岩瀬文庫所蔵、国書総目録題「富嶽之記」）は、大坂の古銭研究会として知られる中谷願山が、享保 18 年（1733）に富士山に赴いた際の記録である。願山は、大宮・村山を経由して圓蔵院という山伏の案内で富士山に登拝しているが、途上で休んだ石室（山小屋）について、「登山多キ時は山伏住して湯をわかし売なれど大宮より八道峻にして登人希なり、故に山伏も住せず」と記し、道の険しさゆえに大宮・村山口が避けられているという見解を述べている。

大宮・村山の各宿坊と深い結びつきが無い場合には、比較的容易に登ることができる他の登拝口を選択することが多かったことを示唆する記事と言えるだろう。

裾野市立富士山資料館には、須山口の 7 冊の「登山道者姓名簿記」（近年のものと思われる裏表紙の貼り紙の統一名称）が保管されており、これも国ごとに道者（参詣者）を記したものであり、18 世紀末から 19 世紀にかけての記載がある。このうち、伊賀国・紀伊国・尾張国・三河国・伊勢国について分析を進めた。これにより、伊勢国の安濃郡・一志郡・飯高郡・飯野郡・多気郡・度会郡、紀伊国の牟婁郡、尾張国の知多郡のように同国内でも参詣者を圧倒的に多く輩出する特定の地域があることが確認できた。また、(2)の現地史料の調査の参考とするため、際立って多くの参詣者を輩出している村を抽出する作業を行った。

(2)富士山への登拝者を輩出した地域に残る道中記や富士（浅間）講の史料を調査・分析した。

大和国については、安政 5 年（1858）に山辺郡岸田村（現 天理市）で作成された「富士垢離之作法」（天理大学附属天理図書館所蔵）を調査した。これは、富士信仰の儀礼の一つである富士垢離に際して唱えられる祝詞・礼文・陀羅尼を記載したものである。このうち、この帳面に記載がある「富士御祓」は、その構成が富士山出現の由緒、富士山各所の本地仏の羅列、精進潔斎の内容となっており、三河国設楽郡山内村（現 愛知県北設楽郡豊根村）に伝えられた「富士山祝詞乃大事」と共通点が見られることが分かった。

摂津国については、興法寺三坊が文久元年（1861）5 月から 6 月にかけて大坂で出開帳を行った際に作成された文書を調査・分析した（聖護院文書）。ここでは、興法寺三坊のために大坂三郷の山上講が町々から寄付金を集めたことが問題となっており、両者が強い結び付きを有していたことが確認できた。

河内国については、八尾市立歴史民俗資料館において、市内大竹地区で使用されていた「大竹富士垢離講」の祭礼道具を調査した。また枚方市史資料室所蔵の交野郡田口村の御用留帳（奥野周一氏文書）より富士山参詣関係の文書を抽出した。交野郡星田村（現 交野市）では、近世に富士垢離講が営まれていたことが記録に残されており、現地調査を行って関係する石造物を確認した。

伊賀国については、伊賀郡大滝村の庄屋の家に以下のように富士山参詣に赴いた三度の記録（全四冊）が残されている（伊賀市教育委員会所蔵「大垣昭尚氏文書」）。享和 2 年（1802）の「富士登御悦請帳」、天保 6 年（1835）の「富士登饞別御山留守見舞悦帳」、明治 5 年（1872）の「富士江参詣留守御見舞被下帳」および「富士山江参詣手覚帳」。これらを翻刻・分析するとともに、伊賀国内に残る富士信仰関係石造物の現地調査を行った。

伊勢国については、「富士参忌服之事外宮神宮之吟味書付」（神宮文庫所蔵）を調査した。これは、享保 8 年（1723）に伊勢神宮外宮の門前町山田の自治組織「三方会合」が、山田町中へ出した触を書き留めたものである。第一条目が富士参りおよび富士垢離に関する規程となっており、富士参詣ならびに富士垢離を行う者が、その時の装束のまま、あるいは数珠などで髪を結び参宮すること、

富士垢離が終わる日に円座（藁などで円く平たく組んだ敷物）をほどいて、一本柳の枝にかけることの 2 つが禁止されている。これにより、伊勢神宮周辺の町村においては、富士山へ赴く際、あるいは富士垢離に際して、伊勢神宮へ参詣する習俗が広く浸透していたことが確認できた。また伊勢国飯野郡西黒部村（現 松阪市）の文書を調査した。西黒部村の講は一度の参詣人数が 50～100 人台を数えることが富士山登山口の集落（須走）の道者帳（参詣者名簿）から確認できる村落である。ここでは、明和 7 年（1770）の「萬留帳」と天明 5 年（1785）の「御用留」から、富士山参詣に関係する記事を抽出した。参詣者の数は、明和 7 年が 25 人、天明 5 年が 30 人で、富士山まで 15 日で往復するとあり、文言の中で「立返り」とあるように文字通り行ってすぐに帰る強行軍であったことが確認できた。また明和 7 年の「萬留帳」に挟み込まれた文書には、講元が「大村講子衆」「寅之屋講子衆」「高す」の富士山への出立の日時を調整している様子がうかがえ、いくつかの講が道中をともにすることにより、登山口集落に休泊する人数が大規模になったこと

が分かった。さらに同村文書中には文化 11 年(1814)の「富士講金年々指引帳」があり、その中では「富士講田作徳米」の売り払い代金として毎年 3 ~ 5 両程度の収入、100 両程度の手元金の利足金として毎年 10 両程度計上されている。西黒部村の講の参詣者数が多いのは、このような資金面での余裕も関係していると考えられる。また、この帳面では毎年「惣垢離入用」として 1 両程度の支出がある。富士山へ参詣しない年には、富士垢離を行っていたことがうかがえる。

尾張国については、知多郡小鈴谷村(現 常滑市)の盛田家文書(鈴湫資料館所蔵)の調査を行った。尾張・美濃・三河では、富士山・立山・白山を一度に巡る「三禅定(さんぜんじょう)」の習俗が知られている。これについて、富士信仰の観点から史料の検討を行った。小鈴谷村を含む近世の枳豆志(きずし)庄九か村においては、富士山先達は松栄寺(同市)、白山先達は高讃寺(同市)と決められており、三山のうちでも富士山を重視する小鈴谷村の参詣者や講中は松栄寺との関係を深めたものと考察した。また小鈴谷村では、参詣の「掟」において村中での事前の儀礼が細かく定められており、講のあり方は、近世後期には個人的信仰に基づくものというよりは、地域としての信仰に基づく形態をとるようになったと考えた。また、知多郡の富士・浅間社や尾張富士(尾張富士大宮浅間神社、現 犬山市)の例から、富士山に見立てた山に神仏を勧請し、宗教施設を整備していくという点において、三重県の伊勢・志摩地域の習俗との共通性を見出した。

(3) 荻野裕子氏が中心となって、三重県の伊勢・志摩地域において、現在まで続く富士信仰に関係する民俗行事の調査を行った。研究期間中の調査地は、伊勢市西条、伊勢市土路、志摩市志島、志摩市立神、紀北町島勝である。これは、後世に富士信仰の儀礼の貴重な記録として残るものであり、古文書だけでは十分に解明しえない実際の儀礼のあり方、古文書に出てくる用語の適切な解釈を知る上で示唆に富むものである。今後、民俗調査と古文書調査の成果を相互に活用することにより、富士信仰への理解を高めたいと考えている。

なお、調査対象地域において「不二道(不二孝)」の史料が確認できた。不二道は、江戸時代後期に富士信仰に基づいて結成された信者組織である。この組織は、食行身禄が唱えた教義に基づき武蔵国足立郡鳩ヶ谷町(現 埼玉県川口市)の小谷三志(1766 - 1841)により組織されたもので、宗教的儀礼よりも日々の実践道徳の積み重ねや日常生活への応用に重きを置く教えにより、信者は関東から近畿・東海地方、長崎周辺にまで及んだとされる。全体的に見れば、近世の近畿・東海地方においては、修験道の色彩が濃い富士信仰に基づいた講が盛行していたといえる。地域社会に近世初期から続く修験道の要素の強い富士信仰が広がるなか、近世後

期以降に個人と個人の繋がりでも不二道が展開している状況であることが想定される。しかし、これについては本研究期間中には十分に検討出来なかった。今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

山形隆司、近世の尾張国知多郡における里修験の活動と村 加木屋村を中心に、知多半島の歴史と現在、査読無、vol.20、2016、pp159-173、<https://nfu.repo.nii.ac.jp>

山形隆司、16・17 世紀の尾張国知多郡の富士信仰 富士山登拝と浅間社の勧請、知多半島の歴史と現在、査読無、vol.19、2015、pp147-156、<https://nfu.repo.nii.ac.jp>

山形隆司、近世の尾張国知多郡における富士信仰 小鈴谷村を中心に、知多半島の歴史と現在、査読無、vol.18、2014、pp91-104、<https://nfu.repo.nii.ac.jp>

〔学会発表〕(計 2 件)

山形隆司、近世伊賀国における富士信仰、第 38 回日本山岳修験学会山北・丹沢学術大会、2017 年 10 月 6 日、山北町立生涯学習センター(神奈川県)

山形隆司、近世尾張における富士信仰の展開 知多郡を事例として、第 35 回日本山岳修験学会鳥海山学術大会、2014 年 9 月 14 日、由利本荘市文化交流館(秋田県)

〔図書〕(計 1 件)

山形隆司・荻野裕子、17~19 世紀の近畿・東海地方における富士信仰の受容(科学研究費補助金研究成果報告書) 2018、150

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山形 隆司(YAMAGATA, Takashi)
日本福祉大学・知多半島総合研究所・研究員
研究者番号: 00342999

(2) 研究協力者

荻野 裕子(OGINO, Yuko)